

聖書:エレミヤ書3章14~18節

説教:背信の子らよ、立ち返れ

はじめに

続けてエレミヤ書を見てまいります。エレミヤが預言者として召されたのは紀元前627年頃で、当時、南王国ユダはバビロンの脅威におびえ、この国の将来はどうなるのだろうかと不安を抱えているような時代でした。そんなときに、エレミヤは語る。「この都は、必ず、バビロンの王の軍勢の手に渡される。」(28:3)ところが一方で、「バビロンは攻めてこない、大丈夫だ」と言う者も現れる。どちらのメッセージが好まれたか。いつの時代もそうですが耳に心地よいことばを人々は聞きたがりです。逆にエレミヤが厳しいことばを語れば語るほど人々は怒り、脅迫されるし、牢に入れられるし、死を覚悟しなければならぬこともあった。そんな苦勞をしてまでみことばを語ったのに、結局ユダ王国はバビロンの手で滅ぼされ、人々は補囚となって外国に連れ去られていきました。今は、何か失敗するとすぐに「自己責任」と言われ、二度と立ち直れなくらい徹底的にたたか時代です。それから言えば、ユダは悔い改めず、自己責任で滅びの道を選び取ったわけですから、二度と元に戻るといふことはありえない。そういうことになる。そうすると、エレミヤがせっかく苦勞して語ったことは全部無駄だったということになる。しかし神のなさることに無駄なことがあるはずはない。必ず意味がある。結論から先に言えば、実はエレミヤはさばきだけではなく、失敗してしまった者を救うために、やがてキリストが来られることも語っていた。それが今日のテーマです。いったいどこにそんなことが書かれているのか。ともに見てまいります。

1 わたしが、あなたの夫であるから

1) 花婿であるイエス・キリスト

14節。「背信の子らよ、立ち返れ——主のことば——。わたしが、あなたがたの夫であるからだ。わたしはあなたがたを、町から一人、氏族から二人選び取り、シオンに連れて来る。」

「わたしが、あなたがたの夫であるからだ。」神と私たちとの関係をわかりやすく表しています。神が夫であり、私たちはその花嫁。聖書では、このテーマが何度も繰り返されています。イエスが断食をせず罪人たちといっしょに食事をしているのを見て疑問に思った人たちがイエスの所やって

来て質問したとき、イエスはこう答えた。マタイの福音書9章15節。「花婿に付き添う友人たちは、花婿と一緒にいる間、悲しむことができるでしょうか。しかし、彼らから花婿が取り去られる日が来ます。そのときには断食をします。」

花婿とはイエス・キリストのこと、友人たちとはイエスと一緒に食事をしていた罪人たちを指しています。これだけ読めば、質問に答えるためにイエスがたまたま花婿の例をもちだしたのかと思いますが、そうではない。旧約聖書のなかで、主ご自身が「わたしが、あなたがたの夫である」と語っていたことが背景にちゃんとある。

みなさん、こんなことを考えたことはなかったでしょうか。「旧約の神はいつも怒ってばかり、しかし新約の神は優しい神。旧約の神と新約の神は違う神ではないのか。」もちろんそんなことはない。旧約の神が新約になって急に性質が変わったとか、別の神になったわけではない。旧約であろうが新約であろうが、神はお一人であり、ご性質も変わることはありません。その証拠のひとつがこれです。「わたしが、あなたがたの夫である。」イエスがご自身のことを花婿にたとえているのは、同じ一人の神だからです。

2) 背信の子ら

神は私たちの花婿で、私たちは花嫁。そのような関係を確認しました。さてでは花嫁である私たちはどんな姿なのでしょう。結婚式で花嫁が白無垢のウェディングドレスを着るのは、それが純潔とか清らかさを象徴しているからです。では私たちは花婿であるイエス・キリストを迎える資格、つまり聖いものであるのかどうか。「背信の子らよ」とあります。これは南ユダ王国の人々に語ったメッセージですが、今の私たちのことでもある。私たちは神の目からご覧になるなら、「背信の子ら」もつとえば「背信の花嫁」である。なぜ背信と呼ばれるのか。今日は読みませんでした3章の前半に、激しいことばで書いてある。例えば3章8節。「背信の女イスラエルが姦通をしたので、わたしは離縁状を渡して追い出した。しかし、裏切る女、妹のユダが恐れもせず、自分も行って淫行を行ったのをわたしは見た。」背信の女イスラエルとは、エレミヤの時代からさかのぼること百年前に滅ぼされた北イスラエル王国のこと、妹のユダ

は南王国のこと。北イスラエルは姦通をした、つまり夫を裏切った。それを南ユダも見ていて、自分を反省するどころか姉と同じことをして夫を裏切った。具体的には、主を捨ててほかの神々をおがみ、供え物をして恥じなかった。それで「背信の子らよ」と呼ばれる。

3) 裏切った花嫁であっても

普通ならどうなりますか。夫を裏切ったわけですから、3章8節にあるとおり、妻に離縁状を渡して家から追い出し、一切近寄るな、顔を見るのもいやだ。そうなる。ところが主のみことばはそこで終わらない。夫を散々裏切った妻に対して「立ち返れ」と呼びかけるのです。そればかりではありません。「わたしはあなたがたを、町から一人、氏族から二人選び取り、シオンに連れて来る。」

あなたがたは補囚となってバビロンに連れて行かれるけれど、あなたがたのなかで、自分たちは罪を犯したのだと言って悔い改める者がいるならば、シオン、すなわちエルサレムに必ず連れ戻して、救い出す。私たちが神を裏切り失敗したとしても、なお救いの道が残されていると、神は語り続けます。

2 神がなさったことを振り返る

1) 牧者たちを送る

では実際にはどのようにして救い出すのでしょうか。ただ黙って何もせずに戻ってくるのを待っているわけではありません。15節。「また、あなたがたに、わたしの心にかなう牧者たちを与える。彼らは知識と判断力をもってあなたがたを育てるだろう。」

「牧者たち」とあるので、これはエレミヤの後に続く預言者たちのことを指すのは明らかです。

2) 羊飼いであるイエス

しかしそれだけではない。主イエスが、ご自分のことについて語って箇所があります。ヨハネの福音書10章10節後半から11節。「わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。」

イエスはご自身のことを花婿にたとえただけでなく、羊飼、牧者のス姿にもたとえておられます。聖書の時代、人々にとっては羊飼いはごく見慣れた職業でしたから、わかりやすいようにと羊飼いと羊をもちだしてきた。確かにそういう面はある。しかしそれだけではない。すでに旧約聖書のなかで預言されていたことを、イエスがそのまま

語っていたということが、ここでもわかる。新約だけ見ると、イエスがある日突然現れて、それまでの古いものを一掃し、十字架がバーンと立てられたようにも見えます、決してそういうことではない。神が旧約聖書で語っておられたことを忠実になぞっていった。

これは何を意味するか。神が一度語ったみことばは、必ず成し遂げられていく。この箇所はそのことを示している。それがわかったら私たちはどうなりますか。「神の約束は本当だろうか」、そんなふうにとときどき疑ったり、迷ったりすることがある。でも疑う必要はない。なぜなら、エレミヤを通して語られた神の約束は、およそ630年後にイエス・キリストをとおして実現したことがわかるから。

3 神がなされようとしていることを信じて待つ

1) 主の契約であるイエス

いま過去を振り返って、神のみことばが確実に実現したことを見てきました。今度は目を未来に転じていきます。16節を読みます。「あなたがたが地に増えて多くの子を生むとき、その日には——主のことば——人々はもう、主の契約の箱について語ることもなく、それが心に上ることもない。彼らがそれを思い出すことも、調べることもなく、それが再び作られることもない。」

主の契約の箱は、モーセがイスラエルの民をエジプトから救い出し、荒野に踏み出したときに主によって与えられたものでした。それ以来イスラエルは契約の箱を守り続け、ソロモンの時代に神殿が建てられそこに契約の箱を納めました。このように契約の箱は、イスラエルにとって神の臨在を表す大切なものだと思われてきた。ところがここには何と書いてあるか。「人々はもう、主の契約の箱について語ることもなく、それが心に上ることもない。」完全に忘れ去られてしまう。ということは、せつかく神が心にかなう牧者たちを送り、それで罪人が立ち返ったとしても、やっぱりまた同じように神を捨てて背信のイスラエルになってしまうのか。

そういうことではありません。17節に「二度と頑なな悪い心のままに歩むことはない」とあります。再び主に背くというのではない。イエス・キリストの十字架を信じて、罪を悔い改め、主に立ち返った者はもう二度とかつてのイスラエルのように主に背いて罪に墮落することはない。完全に救われていく。そう言っているのです。

2) 完全な救い

完全な救いといわれても、わかったようでピンとこない。もう少し具体的に考えましょう。旧約の時代、イエスはまだ来られませんか、罪がきよめられるためには、契約の箱が納められている神殿に来てなんどもいけにえを献げなければなりませんでした。神殿に来られなければ、神殿のある方向を向いていけにえを献げる。そのたびごとに主の契約の箱について語り、心に上り、思い出すことになる。

しかし本当の神殿であり、本当の契約の箱であるイエス・キリストが十字架によって完全な救いは成し遂げたと言うことになればどうなるか。完全なわけですから、旧約の時代の契約の箱はもう必要なくなってしまう。だから思い出すこともなくない。そういうことになると、神はそこまで約束してくださっている。

私たちは、神の目からご覧になるなら「背信の子ら」であります。そんな私たちであっても、どんなに失敗しても、悔い改めてわたしのところに戻って来なさいと呼びかけてくださる。ですから、神の救いにあずかるのに遅すぎるということはない。信じますと告白したその瞬間、あなたはパラダイスにいるのだと語ってください。神の愛がどれほど深いものであるのか、ことばありません。この罪の世でさまよっている方々が救われるよう、ともに祈りたいと願います。